

探訪 北の風景 ⑦

マチの新しい顔比布駅 上川管内比布町

青木和弘

放映前は月30枚程度だった駅入場券の販売枚数が、放映月には6936枚、翌年8月には1万4523枚売れるほど話題になった。

そんな縁で、比布町とピップ株式会社の交流が続き、町が2018年に制定した「比布町応援大使事業」の第一号が、ピップの代表取締役社長松浦由治さんに決まった。翌年の19年から「PIP相互応援大使活動」がはじまっている。

ピップから町へは、転入届や出生届など記念日にピップの商品でお祝いしたり、町限定商品の販売や商品プレゼント、町内の中高生のスポーツ障害予防活動などを推進する。

比布町からピップへは、年間9万人が利用するスキー場や球場などでの広告提示や、町のイベントでの商品告知や販売場所の提供などを行う。

1980年代、故・樹木希林さんが出演したピップエレキパンのCM放映で全国的に知られるようになった宗谷本線「比布（びっぷ）駅」。

プラットホームの駅名看板を背に樹木さんとピップエレキパン製造会社の故・横矢勲会長が並んで立つ。樹木さんが「とうとうやって来ましたね。感動的ですわね」と会長と握手をし、「何か来ないうちにおっしゃったらどう？」と即す。会長が「ピップ」と言った途端、急行列車が大きな音をたてて通過して声がかき消される。列車が過ぎた後、「聞こえた？」と聞く会長に、「ううん、何にも」と樹木さんがほける。

1934（昭和9）年に改築され、2015年まで使っていたが、老朽化のため16年に新築した。利用者数に合わせコンパクトにというJR北海道の提案に、町は「それでは駅前が廃れてしまう」と危機感をいだき、全盛期の面影を残した駅舎を自前で建設した。新駅舎には、町内外の人々が交流できるスペースを設け、カフェカウンター「ピピカフェ」が入居。新鮮な野菜など町の特産品も販売する。駅では「びっぷ駅マルシェ」など多彩なイベントが開かれ、町の新しい顔になった。駅



比布駅の正面にある顔はめ看板。探検服の樹木希林さんと青木和弘の笑顔が訪れる人を出迎えてくれる。このCMは「ピップエレキパン CM+樹木希林」で検索すればYouTubeで観ることができる

前には新しい食堂やカフェが開店するなど、町の狙いは当たった。

比布町の人口は1802世帯3620人（7月末現在）。旭川市の隣町で、上川盆地の北東に位置する。上川農業試験場があり優良米の産地で、人気米「ゆめぴりか」発祥の地だ。昔からイチゴの産地としても知られている。

比布町の集団開拓は1895（明治28）年から。香川県から172人、愛媛県から420人、滋賀県から62人の3団体が入植した。当時はアイヌ住民が数戸散在するだけで、大木やクマ笹が茂る原野は、野生動物の楽天地だったという。

入植者は巨木を切って枝葉は積み上げて焼き、



比布駅のプラットホームのたたずまいは1980年6月のCM収録当時とあまり変わっていないようだ。当時、撮影できる時間帯に通過する急行列車は1日1往復。失敗したら夕方まで撮れないので緊張感にあふれていたという

形状に旧駅の面影を残した新比布駅舎、色は、特産のイチゴにちなんだピンクから、全盛期時代の濃い茶色



ピピカフェの「いくらけ井」は、比布産の分厚い生キクラゲの食感に驚き。ぜひお薦めしたい

ササ原に火を放って農地を拓いた。比布の稲作のはじまりもこの年で、田中亀吉氏が約10メートル四方の田を拓いて試作し、10年後には2町（約2万平方メートル）ほどになり、明治42年には灌漑用水が完成して、畑がどんどん水田に変わっていった。貧しいながらも、開墾は着々と進み、現在の比布町の農業基盤が築かれた。

比布駅は農産物と木材の輸送拠点になった。特に、石狩川上流で切り出した原木は筏（いかだ）に組んで比布まで流送されてくる。それを引き上げて鉄道で各地に搬送したから、多くの働き手が比布に移り住み賑わった。

比布駅開業当時の駅員は12人だったが、現在は貨物や荷物の取り扱いがどうに廃止され無人駅になっている。